



岡山県立誕生寺支援学校 地域との交流会実行委員会(岡山県)

活動テーマ **地域との交流会**

～ 友だちいっぱい 夢いっぱい みんなおいでよ誕生寺 ～

活動の概要

岡山県立誕生寺支援学校で1988年より毎年春に行っている地域住民との交流会です。公民館長を実行委員長とし、地域の各団体がコーナー(アトラクション)を担当。住民と児童生徒、保護者、ボランティア(大学生を含む)でグループをつくり、住民がリーダー役となってウォークラリー形式で校内にあるコーナーを巡っていきます。誕生寺支援学校の校区は広く、児童生徒はスクールバスや保護者の車で通学するか、福祉施設から通学するか、寄宿舎で生活しています。校地も市街地から離れており、他者と関わる機会が少ないのが実態です。そのため子どもたちは、地域の方が学校を訪れ、一緒に活動する交流会をとても楽しみにしています。また、地域の人々に見守られている安心感や地域への所属感を持つことができます。地域の人々は子どもたちの成長を楽しみに学校を訪れ、地域の子どもたちは障害の有無を意識せず、久米南町の仲間として対等な関わりを経験し成長しています。



在校生、保護者、地域の方、小学生、中学生、大学生などたくさんの方が集まります。楽しい時間を共に過ごし「みんなありがとううた来年!」。

活動の経緯

地域住民側からのアプローチで発足

「誕生寺支援学校の児童生徒と一緒にできる活動はないだろうか?」と地域住民側から声が上がったのがきっかけ。体育の授業中に校地の周りをウォーキングする児童生徒の姿を見て、「地域との交流会～ふれあいウォーク～」が発案されました。



開会式でコーナーを紹介し、どのコーナーに行こうかグループで話し合っスタートします。

32年継続し、地域社会のノーマライゼーションを促進

これまで毎年実施され、第32回となった2018年度は児童生徒95名、家族167名、ボランティアを含めた地域の参加者112名に教職員を加え、総勢436名もの人が参加する交流会へと発展しました。



地域のゆるキャラ「カッピー」の貼り絵コーナー。交流会には人気者のカッピーも遊びに来てくれます。

「支援」してもらう立場から「協働」する立場へ

第30回までは地域住民がコーナーをつくり、児童生徒を楽しませることが中心でしたが、第31回からは誕生寺支援学校の中学部の生徒がジュースコーナーを担当。支援してもらう立場から協働する立場になったことで、「自分も働きたい。働ける。」という社会へ向かう意欲や自己肯定感を高める機会となっています。



中学部生が学習の成果を發揮し、笑顔で「ジュースはいいがですか?」とサービスします。

参加者の声

- 長い間には何度か交流会取り止めの危機にも遭遇しましたが、その度に実行委員から「一度止めたら、再び始めるのは難しい。子どもたちの笑顔のために工夫して続けてみよう」と前向きな声上がり、第32回まで続けてきました。(地域住民ボランティア)
- 初めは無表情だった車椅子の女の子が、徐々に笑顔になってくれました。こんな素敵な笑顔ができるんだ。皆同じなんだ。ただし苦手な部分があるだけ。「みんな違ってみんないい」今日改めてこの言葉を教えていただいた気がします。(大学生ボランティア)
- ぼくはちいぎとのこうりゅうかいで、ジュースをおきやくさんにわたしました。きんちょうしました。でも、ありがとうといってもらえて、ぼくもありがとうのきもちになりました。(中学部生徒)

3つの工夫

進め方の工夫

実行委員長の招集により、事前に3回程度の準備会議を実施します。仕事が終わった夜の打ち合わせにも関わらず、「子どもたちのために」と多くの関係者が参加。町の広報誌や町内放送で参加を呼びかけるほか、地域の保育園や小中学校、大学にもチラシを配布します。

連携の工夫

誕生寺支援学校支援地域本部は、学校支援ボランティアの登録者数が約110名、年間活動延べ人数が1,330名程度。誕生寺支援学校の後援会が運営するアンテナショップ(カフェ)では、地域ボランティアの協力のもと、週2回高等部生徒が店員として実習し、接客や販売を行っています。

継続の工夫

実行委員長が学校の職員ではないことで異動に左右されず、地域住民が主体となって途切れることなく息の長い実施ができています。コーナーも、児童生徒の実態、社会情勢に応じてそのスタイルを変え、無理のない形で継続させています。地域サークル等は交流会のために新しい会員を募り、活動を充実させています。

将来の活動の方向性

これまでも地域や子どもたちの様子、ニーズに合わせて内容を変えながら続けてきました。今後も相互に関わり合える関係を大切にしながら、地域全体がつながることのできるこの活動を大切にしていきます。